

## サシバ

サシバはカラスよりもやや小さめ。里山のシンボル・オオタカに間違えられやすいのですが、オオタカよりもスマートで“シュッ”とした感じ。オオタカと同じく「里山のタカ」で、田んぼや湿地に住むトカゲ、ヘビ、カエルなどを食べ、周辺の森に巣を作ります。

サシバは春に東南アジアから渡ってきて本州以南で繁殖し、秋にまた南方へ帰っていくツバメと同じ「夏鳥」です。数十年前までは埼玉県内のあちこちで繁殖していましたが今では、主に比企丘陵の限られた場所だけです。

サシバを見る機会が最も多いのは、9月半ばから10月、秋の渡りのときです。県内の有名な観察ポイントは天覧山（飯能市）と中間平（寄居町）でしょうか。「当たり」の日には、数十～百羽を超えるサシバが見られます。やはり渡りをするタカ「ハチクマ」が見られることもあります。上昇気流を捉えて、一羽また一羽と天空に吸い込まれるように昇ってゆき、やがて風に乗って一気に流れてゆくその姿は、何度見ても感動します。

本格的な渡りが始まる少し前、8月～9月半ばには、県東部の見沼田んぼや黒浜沼（蓮田市）では、梢に止まって休んでいたり田んぼで採食したりするサシバが見られます。茨城、栃木など近県で繁殖した個体が繁殖地を離れた後、休養と栄養補給をしながら、じわじわと南や西へ向かっている途中なのでしょう。これらのサシバは、渡りに適した北風や東風を待っているのだと思います。

ところで秋の渡りに比べると春の渡りは十分に観察されていません。どうやら行きと帰りでコースが違うようです。サシバも「？」だらけの気になる生きものです。（小林みどり）



サシバ

## 会員のつぶやき

昨春、埼玉県を退職。最後の仕事で「さいたま緑のトラスト運動」を担当し、退職後は自然保護に関わることをしたいと、緑の森博物館で里山保全作業を行うため入会させていただきました。近隣の「緑のトラスト保全地」でのボランティア活動にも参加しています。どちらも先輩方の長年の努力に頭が下がりますが、高齢化やナラ枯れの発生等、今後の課題も多いと感じています。

なお、「トラスト運動」は皆様からの寄附金を主な資金としています。不要になった書籍やCD等がありましたら、ブックオフの「キモチと。」（ネット申込み、送料無料）から御寄附いただけると有難いです。（平岡晶子）

## いろいろ生きもの通信 No.11

- 発行日 2023年9月1日
- 発行 NPO法人  
いろいろ生きものネット埼玉
- 事務局 さいたま市大宮区大門  
3-205ABCビル303
- e-mail [iinenet.saitama@gmail.com](mailto:iinenet.saitama@gmail.com)
- WEB | <https://iinenet101.jimdofree.com>

# いろいろ生きもの通信

NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉

## 古寺鍾乳洞の動物調査

比企郡小川町には『里山の鍾乳洞』として知られる古寺鍾乳洞があります。その歴史は古く、1936（昭和11）年には埼玉県の天然記念物に指定されています。

金嶽川のほとり、標高100mほどの里山にポツンと開口するこの鍾乳洞は、入口から最奥部の池まで曲がりくねった洞窟内を辿っても100mに満たないほど小さな鍾乳洞で、大きな石灰岩塊の母岩にぽっかりと空いた洞の内部には、小規模ながら天井部から垂れ下がる鍾乳管や洞床から立ち上がる石筍などもあります。入口は鉄扉で厳重に施錠されていて町当局の許可がない限り立ち入ることはできません。

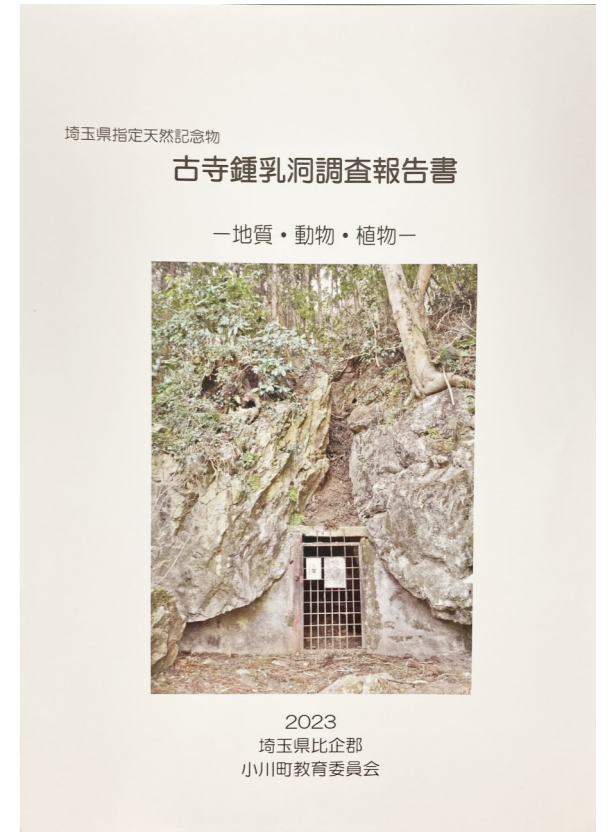
この鍾乳洞が地権者の意向で2018年に町に寄贈されたことを受けて、2020年から2年をかけて自然系3部門（地質・動物・植物）の正式調査がおこなわれ、その前後にも予備調査や補完調査が実施されて2023年3月末に123pp.の調査報告書が刊行されました。

動物分野の調査は、この鍾乳洞の管理が小川町に移管されるという情報を聞いた直後から町文化財課に予備調査をしたいと申し入れ、埼玉県絶滅危惧動物種調査団を中心とするメンバーで2019年だけでも9回もの予備調査を同課の協力を得ておこないました。動物調査は対象が哺乳類や昆虫類、陸産貝類など多岐にわたるうえに、コウモリ類の調査は厳冬期に、昆虫類や多足類などは活動が活発な夏季にと分類群によっても調査適期が異なるため、予備調査から補完調査までの4年間では20回を超える入洞調査を実施しました。

それと並行して、動物の行動を赤外線に反応して自動記録するカメラを常時設置しておく調査法も駆使したことで、普段は立ち入ることができない鍾乳洞という特殊な環境でそこを利用している多種多様な動物たちの生活ぶりの一旦を垣間見ることができました。

今回の動物調査での最大の成果は、何と言っても新種の昆虫の発見でしょう。

2019年の予備調査で得られ2021年にフルテラヒラタツヤムネハネカクシという和名と共に新種記載



古寺鍾乳洞調査報告書の表紙

された体長2cmほどの洞窟棲の甲虫です。発見後の丹念な調査によりトビムシやクモ類を捕食する本種の生態も明らかになり、幼虫や蛹も発見されています。

洞窟の動物と言えばコウモリの仲間も特徴的です。埼玉県内からは秩父地方を中心にこれまでに16種ものコウモリが記録されていますが、古寺鍾乳洞ではコキクガシラコウモリ1種だけが記録されました。天井部にぶら下がって休息して時には3-4cmしかない非常に小さな種ですが、洞内では200頭を超える集団も観察されました。一年を通して稼働させた自動記録カメラの画像解析から、このコウモリは厳冬期にも活動しているというたいへん興味深いデータも得られました。

このほかにも、これまで世界で唯一、秩父の橋立鍾乳洞でしか確認されていなかったクロイシカワカマドウマという直翅系昆虫が発見されたり、プライヤキリバという蛾が3月には洞を出て野外で繁殖し、コナラなどを食べて羽化した新成虫が6月には



洞内壁面のすき間に産み付けられた卵のうを保護するコアシダカグモ♀

入洞してきて多数の個体が翌春まで鍾乳洞内で過ごすという面白い生態も明らかになりました。

古寺鍾乳洞での動物調査は、腰を屈めて歩いたり洞床に這いつくばって微小な昆虫を採集するといったハードなものでしたが、予想以上に面白い成果が得られました。

1970（昭和45）年に一般公開が中止となり入口が閉鎖されてからおよそ50年。洞内環境が長期にわたって安定していたことが、この小さな鍾乳洞が多様な動物相を維持してきた大きな要因だと思います。

今回の調査では、植物分野は洞内でなく主に母岩である石灰岩塊の洞外周辺部の植生調査をおこない、地質分野では県立川越高校地学部の生徒たちも調査に参加して詳細なデータ収集に貢献していました。

短期間の調査ながらよい報告書に仕上がったと自負しています。（碓井 徹）

## 第9回生きものフォーラム結果

テーマ：埼玉県の希少野生植物について考える  
日時：令和5年2月18日（土）13:30～16:30  
会場：埼玉会館ラウンジ（オンライン併用）  
参加人数：68名（会場25名、オンライン43名）

### 【プログラム】

- 講演
  - 「埼玉県レッドデータブック（植物編）の背景とその課題について」  
米林 仲 氏（立正大学地球環境科学部 教授）
  - 「埼玉県レッドデータブック（植物編）の改訂に関わる調査について」  
牧野彰吾 氏（NPO法人埼玉県絶滅危惧植物種調査団 代表理事）
  - 「埼玉県の希少な植物群落について」  
須田大樹 氏（埼玉県立自然の博物館 学芸員）
  - 「埼玉県の希少水生植物ムジナモについて」  
金子康子 氏（埼玉大学教育学部 教授）
- 総合討論

令和5年度を目前に、「埼玉県レッドデータブック（植物編）」の改訂が進められています。本フォーラムでは、このことに着目し、埼玉県レッドデータブック（植物編）の背景とその課題、その改訂に関わる調査からわかった注目点、トピックスとして、埼玉県の希少な植物群落と希少水生植物ムジナモを取り上げ、各テーマに造詣の深い4人の講師に講演していただきました。講演に引き続き、埼玉県でのレッドデータブック改訂や希少野生植物の現状と課題について、活発で有意義な討論が行われました。なお、本フォーラムは、埼玉県生物多様性センターと共同で開催されました。（三輪誠）



第9回生きものフォーラムの様子

## 第6回サイエンスカフェ結果

テーマ：オオカミを知り  
オオカミの消えた日本の森を見つめ直す  
スピーカー：埼玉県環境科学国際センター  
専門研究員 角田 裕志 氏  
ファシリテーター：武村 貴世子氏（ラジオDJ）  
日時：令和4年11月18日（金）19:00～20:30  
方式：オンライン 参加人数：72名

日本のオオカミは、1905年に奈良県で捕獲されたのを最後に生息情報はなく、絶滅したと考えられます。しかし、近年、急激に増加し、生態系への悪影響も顕在化しているニホンジカの問題を背景に、その天敵であるオオカミへの関心が高まっています。

アメリカのイエローストーン国立公園などでは、一度絶滅したオオカミの再導入が既に行われ、シカ個体数の抑制や、植生回復などの効果も現れています。

今回のサイエンスカフェでは、ヨーロッパ等でオオカミの研究を行い、現在もオオカミ研究をライフワークとし取り組んでいる角田さんに、学術的な視点から、オオカミのシカへの影響や、イエローストーン国立公園への再導入の経緯や結果、他の地域への再導入事例などを紹介して頂きました。



日本のシカの現状と生態系影響

要旨は下記のとおりです。

- オオカミによるシカへの影響は直接的な捕食影響だけではなく、シカがストレスを感じ行動や生理を変化させる影響も大きい。
- 狩りの成功率は低く、また、繁殖を盛んに行う世代のシカはあまり捕食しないため、捕食による個体数への影響はそれほど大きく無く、むしろ、恐怖の影響による行動変容が相対的に大きいと考えられている。
- イエローストーンにおけるオオカミの再導入は、1973年から検討を開始し、約20年後に再導入を行った。再導入後、割と早い時期に植生回復が始まり、シカ（エルク）の個体数も現在は3分の1程度になっている。また、ビーバーやムシクイも復活するなど、他の生態系にも大きな変化をもたらした。成功事例として知られているが、批判的な論文もある。
- その後、イエローストーン以外でも再導入が行われ、成功事例も多いが反証の結果もある。
- 日本もシカが増え自然植生が衰退している場所も多いが、オオカミ再導入によりヨーロッパと同様に植生回復が出来る可能性はある。

## 第7回サイエンスカフェ結果

テーマ：かいぼりでもみかえる水辺の生物多様性  
スピーカー：認定NPO法人生態工房  
理事長 片岡 友美氏

日時：令和5年6月16日（金）19:00～20:30  
方式：オンライン 参加人数：38名

近年かいぼりの話をよく聞きます。また、その企画運営を生態工房が自治体などに依頼されて実施していることは、関係者によく知られており、代表の片岡さんに今回その実態を話していただきました。以下は、そのエッセンスです。

「・・・もともとかいぼりは、農村地帯の農閑期の共同作業でした。ため池などの貯水量アップが主目的だったが、1990年代に外来魚オオクチバスの駆除方法として再評価された。練馬区の光が丘公園バードサンクチュアリにおいて、1988、1991、2001年に行なわれ、モツゴとヨシノボリが復活。これには生態工房も参加したが、何しろ楽しかった。この楽しさが、活動継続の大きな動機である。

生態工房は2002年以降、自治体に実施を提案したが、実らなかった。ボート営業の妨害もあるが、自治体が多額の費用を要する浚渫事業と勘違い（混同している？）していたことが原因か。しかし、費用はやりようである。①水抜き②魚を捕獲して在来と外来に分ける③泥をさらう④池底を干す⑤土堀の改修（浅瀬づくりなど）の各手順をいつでもフルセットで行う必要はない。

そんな中、井之頭公園の市民参加の取組が大きな盛り上がりとなった。最初は自転車が250台出てきた。メディアでも注目され、その後、墨田区、町田市薬師寺公園、都立狭山公園、上尾丸山公園、大宮公園などで活動。

かいぼりには、市民参加型と非参加型がある。後者は注目を浴びない。市民参加が望ましい。

井の頭では外来種と在来種の割合が、1回目は84:16だったが、3回目は9:91になった。外来種がいなくても在来種が急増する。また、埋土種子の発芽によるイノカシラフラスコモなどが出てきた。埼玉の丸山公園は公園管理者が継続して水抜きしている。すでに4回干し上げをしているが、水抜きと干し上げだけでも効果がある。大宮公園ではカイツブリが爆発的に繁殖した。

かいぼりがよくわかる本を千葉中央博物館の林さんと作ったので紹介する。・・・」

なお、生態工房はかいぼりの実績などをもとに2022年サントリー地域文化賞を受賞されています。おめでとうございます。（脇坂純一）